

アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身のkikuさんが綴るふるさとエッセイ

—あいなん音故地新— 「人生は一度きり」

先日、知り合った女の子に誘われて都内のライブハウスに彼女のライブを見に行った。20代前半の彼女の歌にはキラキラと希望に燃える思いがみえた。“懐かしい…”。彼女と同じ歳くらいの自分の姿が重なった。

ライブが終わって彼女が言う。歌をやめようかどうか迷ってるんだ、と。アルバイト代だけじゃやってけなくて苦しい、と。あたしは即答した。“じゃ、就職すればいいよ。”って。意地悪で言うわけじゃない。本当にそう思ったから。就職したって音楽は続けられる。音楽家の卵はちゃんとした職に就きながら音楽をする、ということに否定的。音楽への情熱がない、って思ってしまうのかな。プライドなんかな？きっと周りも“音楽は趣味なんや”って思うやろし。ギリギリの生活の中で音楽をやり続けることが美学やつたんよね。きっと彼女もそうなんやろ。

夢を追うためには“生活”っていう土台が必要。周りにどう思われようが何を言われようが、生き抜くことが大事。自分の美学を変えることができたなら、もっと楽しく生き抜ける。“人生は一度きり”母の口癖。なるべく笑っていきたいやん？10年後も彼女が歌を続けてくれたらええなあ。

(テノヒラkiku)

あいなん物産探訪 その⑥

かんぺい 「甘平」

こうじ
中山 孝二さん
(御荘平城)



しっかりと食べたあと、口いっぱい広がる甘さが特徴の甘平。愛媛県が開発した品種で、生産地は県内に限定されている。食べごろは2月上旬で、収穫するまでに冬を越す必要があるため、愛南町の温暖な気候が栽培に適している。「この辺りは雪があまり降らないし、風も強くないので条件が整っている」と説明するのは生産者の中山さん。

中山さんが甘平の栽培を始めたのは7年ほど前のこと。地元の農協を退職後、徐々に規模を広げながら取り組んでいる。栽培の上での苦労は多いが、特に降雨の有無や時期が重要で、甘

平は外皮が薄いため雨が少ないと皮が割れてしまうそうだ。

それほど気を遣う甘平を生産する最大の理由は「自分が食べて美味しいから」。2007年に品種登録されたばかりの新しい柑橘だが、「独特の甘さや食感、美味しさが知られてきた。これからも土づくりにこだわりながら作りつづけたい」と意欲を見せる。

